

ジュール・ルナール全集

16

書簡選・年譜・日記索引



ジュール・ルナール全集

16

書簡選・年譜
日記索引



工業学院図書館

蔵書章

植木隆雄

・ 佃 裕文

深川 志子

ジャン=フランソワ
Jean-François

フ ラ マ ン
FLAMANT

訳編

*訳者略歴

柏木隆雄（かしわぎ たかお）

1944年 三重県松阪市生まれ。

大阪大学文学部卒業。同大学大学院博士課程修了。

パリ第Ⅶ大学第Ⅲ期課程博士。神戸女学院大学文学部助教授を経て、現在大阪大学文学部教授。フランス文学専攻。

佃 裕文（つくだ ひろぶみ）

本名 住谷裕文 1950年 北海道網走生まれ。

京都大学文学部卒業。同大学大学院博士課程修了。

現在大阪教育大学助教授。フランス文学専攻。

深川聡子（ふかがわ あきこ）

1973年 福岡県福岡市生まれ。

大阪大学文学部卒業。同大学大学院博士課程在学中。

Jean-François Flamant（ジャン＝フランソワ・フラマン）

1945年 コルビニー生まれ。ルナール研究家。

ルナールの未刊の手紙を集めた「見い出された書簡」を刊行。他にルナールについての論考もある。

『ジュール・ルナール全集』第十六巻 (全16巻)		一九九九年一月十七日	印刷
		一九九九年一月三十日	発行
編者	住木 裕隆	柏木 隆雄	佃 裕文
訳者	深川 聡子	ジャン＝フランソワ・フラマン	片岡 英三
発行者	ブラザー製版印刷工業	古川 製本所	印刷
製本	古川 製本所	606 804 京都市左京区今出川通川端東入ル	発行所
株式会社 臨川書店		電話(075)721-7211	郵便振替 京都0000-218
落丁本・乱丁本はお取替えいたします 定価は函に表示しております		ISBN4-653-02794-3 [ISBN4-653-02778-1 セット]	

R <日本複写権センター委託出版物・特別扱い>

○本書の無断複写は、著作権法上での例外を除き、禁じられています。

○本書は、日本複写権センターへの特別委託出版物ですので、包括許諾の対象となっておりません。

○本書を複写される場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)を通してその都度当社の許諾を得てください。

ジュール・ルナール全集 第16巻 目次

書簡選		1
『書簡』解説		99
『日記』解説		103
年譜		123
	*	
	*	
	*	
『ジュール・ルナール全集』編集にあたって		162
注		163
索引		I

書
簡
選

佀 裕 文 訳
ジャン＝フランソワ・フラマン
(Jean-François FLAMANT)

本文中に施した傍線——はルナール自身が書簡で用いているものをそのまま踏襲したもので、とくにジャン・フランソワ・フラマン編『見いだされた書簡』(一九九七)収録のテキストでは忠実に再現されている。

収録書簡一覧

No	宛先	(日付／発信地) 頁
(1)	父	(1880年12月4日／ヌヴェール) 5
(2)	父	(1881年10月／パリ) 7
(3)	父	(1881年12月3日／パリ) 8
(4)	姉	(1884年9月3日／パリ) 9
◇ (5)	ロドルフ・ダルゼン	(1890年12月3日／パリ) 11
◇ (6)	ロドルフ・ダルゼン	(1890年12月／パリ) 11
◇ (7)	ジャン・アジャルペール	(1891年2月24日／パリ) 12
(8)	リュシアン・デカーヴ	(1891年7月13日／シトリ＝レ＝ミンヌ) 13
◇ (9)	ある友	(1892年3月25日／パリ) 15
(10)	ポール・ルドネル	(1892年4月19日) 16
◇ (11)	X…氏	(1892年7月4日) 17
(12)	マルセル・シュオップ	(1894年9月10日／パリ) 18
(13)	父	(1894年10月25日／パリ) 20
(14)	トリスタン・ベルナル	(1897年6月20日／ショーモ) 20
(15)	コラーシュ博士	(1897年6月22日／ショーモ) 21
(16)	マルセル・ブーランジェ	(1897年6月23日／ショーモ) 21
(17)	兄	(1897年6月26日／ショーモ) 22
(18)	兄	(1897年6月27日／ショーモ) 22
(19)	兄	(1897年6月30日／ショーモ) 23
◇ (20)	レオン・ブルム	(1897年7月19日／ショーモ) 24
(21)	リュシアン・デカーヴ	(1897年8月28日／ショーモ) 26
(22)	ロマン・コーリュス	(1897年12月4日／パリ) 28
(23)	エドモン・ロスタン夫人	(1897年12月28日／パリ) 29
(24)	モーリス・バレス	(1898年2月1日／パリ) 31
(25)	トリスタン・ベルナル	(1898年8月9日／ショーモ) 33
(26)	フランシス・ジャム	(1898年10月27日／パリ) 34
◇ (27)	レオン・ブルム	(1899年4月18日／パリ) 35
(28)	リュシアン・デカーヴ	(1899年7月3日／ショーモ) 36
(29)	トリスタン・ベルナル	(1900年1月23日／パリ) 37
◇ (30)	エドモン・セー	(1900年4月2日／パリ) 38
(31)	トリスタン・ベルナル	(1900年4月30日／ショーモ) 39
(32)	アルフレッド・アティス	(1900年5月18日／ショーモ) 39
◇ (33)	ルイ・バイヤール	(1900年9月1日／ショーモ) 41
(34)	モーリス・ポトシェール	(1900年9月6日／ショーモ) 43
(35)	エドモン・ロスタン	(1900年12月8日／パリ) 45

◇ (36) シュザンヌ・デブレ	(1900年12月12日／パリ) 46
(37) ロマン・コーリュス	(1901年5月14日／ショーモ) 47
(38) モーリス・メーテルランク	(1901年5月21日／ショーモ) 49
(39) ポール・コルニュ	(1901年8月26日／ショーモ) 50
(40) リュシアン・デカーヴ	(1901年11月9日／パリ) 51
(41) リュシアン・デカーヴ	(1902年3月26日／パリ) 53
(42) マルセル・ブーランジュ	(1902年5月24日) 53
(43) アントワーヌ	(1902年9月9日／ショーモ) 55
(44) リュシアン・ギトリー	(1902年9月23日／ショーモ) 57
◇ (45) レオン・ブルムあるいはマルセル・ブーランジュ	(1902年10月) 58
(46) エドモン・ロスタン	(1903年1月2日／パリ) 59
◇ (47) リーズ・ブルム	(1903年2月27日／パリ) 60
◇ (48) レオン・ブルム	(1903年12月7日／パリ) 62
◇ (49) レオン・ブルム	(1904年5月18日／ショーモ) 64
(50) アントワーヌ	(1905年4月3日／パリ) 65
(51) ジャン・ペーシェ	(1906年1月23日／パリ) 66
◇ (52) アンドレ・ルナール	(1906年3月1日／パリ) 67
(53) ファンテク	(1906年5月8日／ショーモ) 69
(54) ファンテク	(1906年5月17日／ショーモ) 70
(55) ファンテク	(1906年5月21日／ショーモ) 70
(56) アンドレ・ピカル	(1906年5月25日／ショーモ) 71
(57) ファンテク	(1906年6月14日／ショーモ) 73
(58) リュシアン・デカーヴ	(1907年5月25日／パリ) 74
◇ (59) アルフレッド・ヴァレット	(1907年12月22日／パリ) 76
◇ (60) オーギュスト・ロワ	(1908年3月10日／パリ) 77
(61) トリスタン・ベルナル	(1909年1月13日／パリ) 79
◇ (62) ラシルド	(1909年1月16日／パリ) 80
◇ (63) アントワーヌ	(1909年2月12日／パリ) 81
◇ (64) アントワーヌ	(1909年2月17日／パリ) 82
(65) アンドレ・ジッド	(1909年12月3日／パリ) 83
(66) 姉	(1910年1月10日) 84
(67) ランドウスカ夫人	(1910年2月15日) 85
(68) モーリス・ポトシェール	(1910年2月28日／パリ) 86
(69) 姉	(1910年3月15日／パリ) 87
(70) リュニエ＝ポー	(1910年4月6日／パリ) 88
(71) 姉	(1910年4月6日) 88

◇はジャン・フランソワ・フラマン編『見い出された書簡1884-1910』(1997)

Jean-François Flamant, *Lettres retrouvées 1884-1910*, 1997 ©Cherche Midi Éditeur
より訳出。

(一)

父親宛

ヌヴェールにて 一八八〇年十二月四日

親愛なるパパへ

僕は数学は一番、ラテン語作文は七番でした。クラスには十八ないし二十人の生徒がいます。

この後者の席次については注釈は一切避けまます。というのも、僕の考えでは、パパはそもそも一般的にどんな作文についても——しかもとりわけラテン語作文についてはよくご存じだからです。

まだ僕はパパに自分の先生についてちゃんと書いたことがありませんでした。彼は多くの点で独特な人間ですが、あらゆる点で僕の気に入りません。彼は立派な風采をしています。そして立派な風采をしているので、勿体ぶったところがあります。したがって虚栄心もつよいのです。彼には独特の、変な目標があります。彼は皆から尊敬してもらいたいのです。そしてこの尊敬を、自分の言葉に謹厳実直な調子を与えることで手に入れようとし

ているのです。彼は自分のことを粘土細工だと思い込んでいて、僕たちのこともまた粘土細工なのだと考えているのです。彼は教師たるものは威厳ある存在でなければならないと思いますのです。それにたいし僕ら生徒は尊敬と服従をもって対し、敬意のまじった心づかいをしなければならぬのです。彼はひとつの方式を生みだし、自らひとつの計画を描き、そしてそれに従うために、毎朝、自らの私生活を嚴肅さのヴェールをまとうのです。そしてそのヴェールのひと隅を持ち上げれば、おそらく「輕率」と書かれてあるのが見られるでしょう。

このヴェールを彼は戸口に置くと、また入る前の彼に戻るのです。哀れな教師よ、他の多くの人々と同じように自分の役割を演じるがいい！ 僕たちのあいだに現われるときは、きまって偽善者の仮面をかぶって現われるがいい。僕たちにたいしては氷のように冷たい大理石の彫像であるがいい。その冷たさの中で、高貴で陰鬱な、古代的な顔つきをしているがいい。しばし自分を高みに引き上げたその台座から、降りないように用心しろ。しかしました、けたたましく笑って、權威を失墜しないよう気をつける。からかい好きの牧神が衣服のはしを引っ張り、

おまえの隠しているその姿を白日の下にさらさないよう用心しろ。

尊敬、威厳、重々しさ——岩に当たって砕ける波のようによく響く、しかしもうい言葉です。数知れない自分の夢の中に、僕は亡霊の影を認めたのです。それらは夢に緋色のおおいをかぶせていたのです！僕はひとつの形をとり、それを保とうとするピンク色のむら雲を認めたのです。ああ、先生よ、おまえを見るとそんなことが思われる！

それではおまえは人は自分が評価できる相手しか尊敬しないということを知らないのか？他の人間については軽蔑したり、あるいは彼らと隣りあっても知らんぷりなのだ。無関心、これこそはおまえのための言葉だ。倦怠、それは僕たちのための言葉だ。何と悲しい人生そして何と悲しい運命か！偶然が僕たちに投げつけた人間とまるっぽ一年一緒にいる、そしてその一年が過ぎると、驚いてこんなに長いあいだ隣りあって歩いたこの人間はだれだったのか、と尋ね合うのです。本当に笑うべきことです。礼儀作法と威厳以上によいものはないと信じる精神があるのです。「共感」という言葉は彼らの冷笑を

買うのです。自分自身と人生について偉大で高尚な観念を抱いていれば、正しい思考をしていることになる、信じ込む哲学者連中です。

こんなことを書くのも、親愛なるパパ、ひとえにこの先生がまったく僕の好みでないということを述べるためなのです。ほんとうに僕はどうしたら最後までやれるか分かりません。でもきつと、とても陰鬱で、とても味気ない、そしてじつに不毛な修辭字綴での勉強になるでしょう。

そしてそればかりか、パパがどれほどお笑いになろうとも、僕はついにはリーガル先生に辟易するでしょう。パパにはすでにもう——しかも一度ならず——彼について僕の考えているところをお知らせしました。パパは僕の言葉に大して注意を払われませんでした。でも、パパにこのことは言っておきます。時間が経てばたつほど、僕はますます自分が間違っているなどとは認められなくなるのです。それに彼の欠点——パパによればルーズということになりましたが、僕なら頭が固いのだと言うところですよ——には腹が立ってなりません。まったく頭が固いのです。こう考えるのは僕だけではありません。僕は

彼に誓いの言葉を呈することになっていました。でもそんなことはやらずに済ませますし、彼の方もまた同じです。そんなことをして復讐しようというのではありません。だって僕にはそんなけな考えなぞありませんから。でも、誓いの言葉を述べるとなれば、自分にもなかなかできない考えと言葉遣いをしなければいけないはめになるでしょう。そして自分というもののおかげで、僕もまだ自尊心をなくすところまでは行っていないのです。口をつぐむ——それは結構です。でもこれ見よがしに献身と愛情の誓いをするには、僕は同意できません。言葉というものは、嘘のない、心からの考えを表現するためにのみ用いるべきです。したがってこの仕事は同じクラスの他の生徒に譲りました。

自分の寝室のことをリーガル夫人に話したりはしません。彼女の部屋はみなふさがっているのです。それにたとえ空いているとしても、僕は目下あまりにも苦々しい思いをしているので、ぜんぜん夫人の世話になぞなりたくありません。

さようなら、敬愛するパパ。

日曜にはアメリカとモリスに便りします。とりあえ

ず彼らにキスを、そしてママにも。知り合いの人たちによろしく。

ジラールさん一家によろしく。

できたらご返事ください。ただけたら僕はうれしいです。

(一)

父宛

「パリ」 一八八一年十月

無事着きました。

三十フランの部屋を見つけるのは、僕には不可能でした。どこも光の入らない、キャフェに隣接した部屋ばかりです。三十五フランの部屋を見つけ、もう金を払いましたが、受取りは無しです。お粗末な部屋です。その貧相さを目にしたとき、僕は深刻な気持ちになりました。

部屋はシャトレ広場の近くのジャン＝ランティエ街八番地の五階だったか六階だったかにあります。リヴェイ夫

妻の経営するホテルです。

シャナの兄弟が腕時計を四十フランで売ってくれたので、小ジョッキを一杯おごりました。

いまキャフェ・ダンヴェールにいます。ノール氏^{ノール}を待つているのです。

二、三日たったら、もっと詳しい便りをします。

お手紙はつぎの住所宛てにお送りください。ジャン＝ランティエ街八番地「サン＝マグロワール」ホテル。

(三)

父宛

「パリ」 一八八一年十二月三日

まるで僕らはほとんど死人同然です。

要するに、順位の入れ替わりはまれにしか起こらないのです。哲学は成績がよくなりません。たぶん僕は生まれつき哲学に向いていないのです。最近、論述試験がありました。順位はけっして不動というものではありません。

ん。しかし中より上に入るためには相当苦勞するでしょう。ずっと前から、僕たちには分かり切ったことですが、順位などでは何も明らかになりません。しかし教師の講評は重視できます。だいたい以下のようなものでした。『この答案から貴君の力が全体的に把握できる。ある程度精神の鋭敏さはあるが、つねに不明瞭で、そのため成績は下位になっている。一度に多くの問題を提起しすぎ、そのせいで徹底的にひとつの問題が扱えない。目標に達するまでにあまりに長い道をたどることになる。その結果、主題の一貫性が破られることになる。要するに「貴君は規則と明晰さに自分を馴致させ」なければいけない。貴君の答案は大いに評価できるものの、こちらが吟味しうるのは結果だけなのである』と。

結局、この評定から無くてはかなわぬ手心を差し引けば、以下の結論が引き出せます——「この状態から脱却するのは骨が折れるだろう」。哲学は僕向きではありません。その証拠に哲学は何も証明しません。僕は一切が証明されることをつよく望むのです。あまりに奥へ踏み込もうとすると道に迷い、精神は闇に包まれます。それはおそらく、分析というものが明るい光を散逸させ

るからなのです。眞実は相対的なものにすぎません。世界は幻想にすぎません。それを説き明かそうとする愚か者たちよ、おまえたちは人生を台なしにするのだ。

ディセルタシオンを行う習慣はひとをぐずぐず引きずってゆきます。手短かに言えば、学問のおごりがおびただしい不決断をもたらします。

しかし続けましょう。倦怠を追い払うために、そのことはもう考えないことです。

僕は、今年は、相当いろいろ活動しています。その結果はどんなことになるのでしょうか？ 何でもやっています。地方紙に無署名の論評さえ送っているのです。確かに活字にしてくれますから。むしろ政治評論ではありません。というのは、僕は政治向きのことはさっぱり不案内な上に、興味も引かれないのですが、どんな事柄でもどんな人間についてでも、論評なら興味がそそられるからです。いつか僕はこれで、生計を立ててゆくことになるでしょう。それに日曜の朝、響きのいい言葉をならべて一時間も過ごせるのです。それでとどのつまりは一時自分の稼ぎがあったわけです。

僕は、当然のことながら、ハーフブーツにかかった代

金の穴埋めをしました。いかなる名目であれ、たとえば前払いとして、パパがこの補填を求められるとしても、驚かないでください。それにこれはパパと僕のあいだの合意だったのですし、必要のなせるわざなのです。

僕はときおりパシーに行きます。

たった今、お手紙拝受しました。ご質問に答えます。

僕の懐具合はどうか？ もうだいぶ前のことになりましたが、二十フラン払戻してもらいました。パパの来られるのが遅れたら、この二十フランもじき底をつくでしょう。

(四)

姉宛

「パリ」 一八八四年九月三日

姉妹はおありですかと尋ねられると、たしかに一人ありました。まだサンテチエンヌに住んでいるのでないなら——うっすら覚えているのは姉はその町に行つて、もうずいぶん経つのですが——亡くなったのにちがいがあ

りません、と答えるのです。

「そうですとも、わたしは譲りはしないわ！ 断じてそんなことはありません！ あれは一番年下なのです。彼は私には……」。そもそも姉さんは、僕が一番年下だとしても、僕についてあまりに何も知らなさすぎるのです。それからというもの！……それにそんなことは理由になりません。そういうわけで、姉さんにも自分の間違っていることは明らかにはずです。

もし姉さんが、僕が人から言われたことを知ったなら！ それを姉さんに伝えるなんてほとんどためらわれます。まずこちらにもそれにはまったく唾然とされました。もし姉さんが、僕が人から言われたことを知ったなら！ でも、そんなことはまさかと思いがちでも、教えてあげてもいいですよ、お笑い草に。もし姉さんが、僕が人から言われたことを知ったなら！

僕は言われたのです——「それは本当に本当なの？ それじゃその『生まれてくる』彼なり彼女なりが、歓迎されますように！」と。

詩人ぶるのはやめるのだ。ああ！ 詩人ぶるのはやめるのだ。僕は詩人だった若い男を知っています。彼が通りすぎるときは、みな訳知りらしく軽くウインクし、やさしい微笑を浮かべ、彼のことを指さし合うのでした。彼が詩を朗読するときは——やれやれ——ぽかんと口をあけて皆それに耳を傾けるのです。何という才能！ 彼は何とユニークなのか！ そして女たちは……

ある日、彼は芸術の保護者であるさる富裕な紳士に、あとで返済する約束で五フランを求めたのです。その紳士は笑い出しました——「詩人ですと！ 詩人に金ですと！……ねえ、あなた、あなたは青空を、小川を、薔薇色のくちびるを、純粋な心を忘れていらっしゃる！」詩人だったその青年は悲しげに立ち去ると、死んでしまいました。

おわかりのように、これは遺憾なことです。さいわいなことに僕はこの話を一言も信じていません。それにこの話をしてくれた紳士はおそらく大げさに言っていたのです。どうでもいいことです。僕は姉さんにいたいけな坊や——姉さんのちびちゃんの素質をよく観察するように勧めます……

坊やには別あつらえの、刺繍のしてある帽子[＊]を送りましょう。約束しましたよ。

姉さんご理解されるでしょうが、僕は軍隊には当然必要ないのです。姉さんご存じのあのスマートさは純然たる鋼、あるいは少なくとも三重の青銅でできたお上品な見せかけにすぎないといくら言っても駄目でした。情熱の麻痺したあの連中には、比喩^{メタファー}というものが理解できないのです。うちの血統は……口をつぐむことにしましょう。うちの家族は僕一人ではないのですから。

あいかわらずジャン＝ランティエ街八番地です。

(五)

ロドルフ・ダルゼン宛て

ロシエ街四十四番地 一八九〇年十二月三日

肅啓

ジュリアン・ルクレール氏^{＊10}になり代わり、私ども——
ルイ・デュムール氏と私は、明日十二月四日木曜ご都合

よろしき刻限に、ご会見いただきますようお願い申し上げます。

恐々謹言

ルナール^{＊12}

(六)

ロドルフ・ダルゼンあて

ロシエ街四十四番地^{＊13} 一八九〇年十二月

ジュリアン・ルクレール氏側からは
ジュール・ルナール
およびポール・ゴーギャン

(七)

ジャン・アジャルベール宛て

ロシェ街四十四番地

一八九一年二月二十四日

拝啓 ご高著『女たちと風景』お送りくださり、大変嬉しく存じました。

以前「恋ざかり」拝読の機会がありましたが、あの「恋ざかり」の詩にも大兄のすばらしい小説を読んで当方がすでに注目していた点——平凡なもの、陳腐なもの、しかも「すでに書かれていること」への強靱な嫌悪——を認めたのでした。

大兄の「肌」にはすっかり感服させられました。絶対的に何かを好きにならなければいけないならば、あれが当方の好みです。さらには不公平のそしりを受けるかもしれませんが、「女たちの風景」への好みには止み難いものがあります（四、十一、十二、二十六等々）。

その他で私の気に入っているのは、大兄がつねに明晰な——きわめて明晰な書き方をされていること、そして

もっとも幻想におぼれ身を捻らせているときでも、「大兄の文体」は古典的な悦に入った表情からも、過度のサンボリスムからも、同様にへだたった位置におられることです。当方はフランス語を立派にあやつろうとする才能ある人々に会おうと、ほっとした気持ちを覚えます。

それは私を不安——そこでは私は頭脳の健康に依拠しているのですが——から引き出してくれます。そしてこちらに理解できない人には、尊敬が持てなくなります。

大兄には固有の流儀がおありになるのかどうか、いかなる流派に分類するのが適切か、私には分かりません。しかし大兄のものを拝読したかぎりは、つねに独自で選り抜きのものと思われました。

お信じください——このことはお便りする前からしじゅう思っております。

大兄がお与えくださった快い喜びに、感謝申し上げます。どうか私たちの関係が、最近のあの、あまりに非文学的な会見で終わることがないように念じております。

敬具

ジュール・ルナール

(八)

リュシアン・デカーヴ宛て

シトリール・レ・ミンヌ、コルビニー経由

ニエーヴル 一八九一年七月十三日

親愛なるデカーヴさん、大兄の手紙の日付けを見ますと、七月二日です。まさか！ 時の経つのは何と早いことでしょう！ 当方もここまで非礼だったためしはありません。しかし言い訳は——正真のやつがあるのです。こちらは四六時中自転車を乗りまわし、そこから引き離すのは一苦勞なのです。何と、そこで寝るのですからね。じつのところこちらもうんざりしているのですが、二十八日間教練の準備をしなければいけないのです。ああ、僕も昔は適応力に富んでいたのですが。二十八日間行軍の準備をするために、二か月前から取りかかっているのです。こうすれば疲勞を感じずに済むようになるでしょう。だって疲れているのはとうの昔からなのですから！

そう得心されるのです。

ええ、ええ、釣りはしますとも。つまり、こちらから魚の前に腰をおろし、互いに待つのです。

『木莓のジャック』という小説についての大兄のお話は、当方にもいたく面白く感じられました。当方自身も一瞬てっきりこれは「自分の作品だ」と思ったので、なおさらです。それほどあの広告には驚きました。でも、そんなことはちっとありません。自分の原稿はすべてそろえて地下室のトランクにしまっておりま。それにいまだ、当方から原稿を盗もうとした者はありません。ですから、祝いの言葉はとっておいてください。当方に出版社とは何か——自らの費用で出版し、契約を結び、サインを求めたりよこしたり、多くのことを約束し、すべてを履行する、その出版社とは何か——分かる日まで。大兄は——これはお信じいただきたいのですが——当方が羨望し、かつまた尊敬する方なのです。とすれば、当方のアルフォンス・ドーデ¹⁶にたいする讃嘆の念は、いかばかりのものでなければならいでしょうか！

ドーデはお元気ですか？ ええ、彼こそは心底ひとから愛されるすべを知悉しているに違いない、知的活力に